

卷絹

観阿弥作

ワキ 官人

ツレ (男) 都の持夫

シテ 神子

地は 紀伊

季は 冬

ワキ詞

「そもく是は当今に仕へ奉る臣下なり。さても我君あらたなる霊夢を蒙り給ひ。千疋の卷絹を三熊野に納め申せとの宣旨に任せ。国々より卷絹を集め候。さる間都より参るべき卷絹遅なはり候。参りて候はゞ神前に納めばやと存じ候。

男次第

「今を始めの旅衣。く。紀の路にいざや急がん。

サシ

「都の手振なりとても。旅は心の安かるべきか。殊更是は王土の命。重荷をかくる南の国。聞くだに

下歌

遠き千里の浜辺。山は苔路のさかしきを。いつかは越えん旅の道。休らふ間もなき心かな。

上歌

「朝もよい。紀の関越えて遙々と。く。山又山を其処としも。分けつゝ行けば是ぞこの。今ぞ始めて三熊野の。御山に早く着きにけり。く。

男詞

「急ぎ候ふ程に。三熊野に着きて候。先々音無の天神へ参らばやと思ひ候。や。冬梅の匂ひの聞え候。

何くにか候ふらん。実に是なる梅にて候。此梅を見て何となく思ひ連ねて候。南無天満天神。心中の願をかなへて賜はり候へと。

地「神に祈りの言の葉を。心の内に手向けつゝ。急ぎ参りて。先づ君に仕へ申さん。

男詞「いかに案内申し候。都より巻絹を持ちて参りて候。

ワキ「何とて遅なはりたるぞ。其為めに日数を定め参る中に。汝一人おろかなる。

地「其身の科は遁れじと。く。やがていましめあらけなき。苦しみをを見せて目のあたり。罪の報いを知らせけり。く。

シテ詞「なふくその下人をば何とていましめ給ふぞ。其者は昨日音無の天神にて。一首の歌をよみ我に手向けし者なれば。納受あれば神心。少し涼しき三熱の。苦しみをまぬかるそれのみか。人倫心なし。其縄解けとこそ。解けや手櫛の乱髪。

地 「解けや手櫛の乱髪の。神は受けずや御注連の縄の。

引き立て解かんと此手を見れば。心強くも岩代の松の。何とか結びし情なや。

ワキ詞

「是はさて何と申したる御事にて候ふぞ。

シテ詞

「此者は音無の天神にて。一首の歌をよみ我に手向けし者なれば。とくく縄を解き給へ。

ワキ

「是は不思議なる事を承り候ふ物かな。かほど賤しき者の歌などよむべき事思ひもよらず。如何様に

も疑はしき神慮かと存じ候ふよ。

シテ

「猶も神慮を偽りとや。さあらば彼者昨日我に手向けし言の葉の。上の句を彼に問ひ給へ。我又下の句をばつゞくべし。

ワキ

「此上はとかく申すに及ばず。如何に汝誠に歌をよみたらば。其上の句を申すべし。

男

「今は憚り申すに及ばず。彼音無の山陰に。さも美しき冬梅の。色異なりしを何となく。心も染みて

かくばかり。音なしにかつ咲きそむる梅の花。

シテ
「にほはざりせば誰か知るべきと。よみしは疑ひなきものを。」

地
「もとより正直捨方便の誓ひ。曇らぬ神心。直なる故にかくばかり。納受あれば今は早。疑はせ給はで歌人を。ゆるさせ給ふべし。または心中に隠し歌も。神の通力と知るなれば。実に疑ひの仇心。打ち解け此縄を。疾くく免し給へや。」

地クリ
「それ神は人の敬ふによつて威を増し。人は神の加護によれり。」

シテサシ
「されば楽しむ世に逢ふ事。是れ又総持の義によれり。」

地
「言葉少なうして理を含み。三難耳絶えて寂念閑定の床の上には。眠り遙かに眼を去る。」

クセ
「是によつて。本有の靈光忽ちに照らし。自性の月やうやく雲をさまれり。一首を詠ずれば。よろづ

の悪念を遠ざかり。天を得れば清く。地を得れば
安しあらかじめ。唯一実相。唯一金剛とは説か
ずや。

シテ「されば天竺の。

地「婆羅門僧正は。行基菩薩の御手を取り。靈山の。
釈迦の御許に契りて。真如朽ちせず逢ひ見つと。
詠歌あれば御返歌に。伽毘羅衛に。契りし事のか
ひありて。文珠の御顔を。拝むなりと互に。仏々

を顕はすも。和歌の徳にあらずや又。神は出雲八
重垣。片そぎの寒き世のためし。言はずとも伝へ
聞きつべし。神のしめゆふ糸桜の。風の解けとぞ
思はるゝ。

ワキ詞

「さあらば祝詞を参らせられ候ひて。神を上げ申さ
れ候へ。

シテ「謹上再拜。そもく当山は。法性国の巽。金剛

山の靈光。此地に飛んで靈地となり。今の太峰是

なり。

地 「されば御嶽は金剛界の曼荼羅。

シテ 「華藏世界。熊野は胎藏界。

地 「密嚴淨土有難や。（神樂）

地 「不思議や祝詞の神子物狂ひ。不思議や祝詞の神子物狂ひの。さもあらたなる飛行を出だして。神がたりするこそ恐ろしけれ。

シテ 「証誠殿は阿弥陀如来。

地 「十悪を導き。

シテ 「五逆をあはれむ。

地 「中の御前は。

シテ 「薬師如来。

地 「薬となつて。

シテ 「二世を助く。

地 「二万文珠。

シテ 「三世の覚母たり。

地 「十万普賢。

シテ 「満山護法。

地 「数々の神々。彼覲につくもがみの。御幣も乱れて
空に飛ぶ鳥の。翔りくゝて地に又踊り。数珠を揉
み袖を振り。高足下足の舞の手を尽し。是までな
りや。神は上らせ給ふと云ひ捨つる。声の内より
狂ひ覚めて。又本性にぞなりにける。